

報告

地域産業研究会現地見学会報告

豊かな自然の魅力を活かした持続可能なまちづくりへの取組 (黒松内町の北限のブナ林見学と移住者の暮らし訪問)

地域産業研究会地域活性化分科会 柴 田 登

1. 黒松内町見学の目的

昨年は、島牧村を主体に、黒松内・寿都の南後志 3 町村の北限域のブナ林などを見学した。情報交換会では、それぞれの首長さんから技術士会へ活性化支援の声が寄せられた。今年は、10 月 1 日(金)と 2 日(土)、黒松内町で力を入れて取り組んでいるブナ林再生事業と移住対策事業について、関係部署の方々にご案内戴いて、見学や意見交換を行った。

2. 見学・研修目的と訪問先

1 日目：平成 22 年 10 月 1 日(金)

・移住者訪問と意見交換

①環境雑貨屋&有機農園「リトルトリー」

②喫茶& B & B 「タンポポハウス」

・北限ブナ林の研修施設見学

③黒松内ブナセンター（説明：齋藤均学芸員）

・情報交換会：若見町長の講演とワークショップ

④環境学習センター（歌才自然の家隣接）

・懇親会：ワークショップの成果発表と意見交換

⑤歌才自然の家

2 日目：平成 22 年 10 月 2 日(土)

・移住促進施策の施設見学

⑥お試し移住体験ハウス「和・洋風型」

・天然記念物の北限のブナ林見学

⑦歌才ブナ林(案内と説明：松浦ありさ学芸員)

・移住者訪問と意見交換

⑧和生菓子「すずや」

⑨木工房「Pat woodworking」

3. 黒松内町の紹介

人口約 3,200 人、面積 345 ha の黒松内町は、後志管内ニセコ山麓の南を東西に横断する黒松内低

地帯に位置する。噴火湾沖で千島海流と対馬海流がぶつかることによって、春から夏にかけて発生する海霧は、かつては海の底だったといわれる黒松内低地帯の太平洋側から日本海側への傾斜に沿って流れ、中央部の丸山にぶつかって、霧雨とも違う、地元では「じり」と呼ぶ状態になって停滞する。その影響でもち米以外、稲作には適さない環境だが、丸山周辺は天然記念物の歌才のブナ林を中心とする豊かな森林を形成、黒松内低地帯はブナの北限域となっている。

農業は畜産・酪農が主体で、乳製品や食肉加工品などの黒松内ブランドが人気商品となっている。

黒松内低地帯の太平洋側に源流を持つ朱太川は、本流にダムを有しないことから、カワシンジュガイなどの希少種が棲息する貴重な生態系を維持している。最近注目される生物多様性への取組に関しても、ブナ林の保護を中心とした施策で自然環境重視のまちづくりを進めてきた姿勢は高く評価されている。

自然環境を活かした交流事業や移住対策の展開も活発で、ブナセンターなど 7 箇所の交流施設を訪れる人は年間 15 万人に上り、この 20 年間の移住者は 20 世帯を超え、50 人以上を数える。

黒松内は北海道横断道の起点となっており、自動車交通では、内陸から両海岸線方向への道南地方における結節点の位置にある。札幌圏・函館圏からの距離感と、海を持たないことで、魅力に欠けると取られる面もあるが、逆に、高速道路や新幹線など高速交通網の整備により、その地理的なポテンシャルと豊かな自然の魅力は大いに高まる予感がある。

4. 黒松内に移住して来られた皆さんとの意見交換

(1) 意見内容一覧

氏名	宮川哲治氏 (40代)	田中弘二氏 (50代)	宮内幸基氏 (40代)	岡田通人氏 (30代)
移住年	2000 年～	1993 年～	2007 年～	2007 年～
どこから	出身は福岡県	大阪市から移住	鎌倉市から移住	西宮市から移住
家族構成など	高知県出身の奥様とは北海道で結婚、子供二人は黒松内生まれ	奥様は静岡県出身 ご主人は、町内の移住者ネットワーク副会長	奥様と子供二人 子供一人は黒松内生まれ	独身
仕事 (「」内は店名 又は工房名)	・環境雑貨屋 ・有機農園 「リトルトリ」	・喫茶店 ・B & B ※ ₁ (Bed & Breakfast) 「タンポポハウス」 ・有機農業 ・健康体操の普及	・和生菓子屋 「すずや」	・木工房 「Pat woodworking」 (建築業から転進)
住居及び仕事場	・旧酪農家住宅 2 棟 (1 棟を雑貨屋店舗に利用)	・住宅(住居兼喫茶店) ・宿泊施設(B & B)	・旧酪農家住宅 (玄関先販売)	・廃校(小学校)の旧教員住宅を住居に利用 ・同廃校の体育館を材料置場に、教室を加工場に利用
黒松内へ 移住した動機	・北海道に住みたかった ・前職(環境市民団体)当時、黒松内に来たことがある	・生き方の見直し(充実感) ・自分が試される所(自給自足に近い、納得できる生活の場) ・過疎地、但し飛行場へ 1 時間以内の所 ・太平洋と日本海に近い所 ・役場担当者の対応	・ご主人が北海道大好き ・子供たちの健康(光化学スモッグを避けた暮らし) ・雑誌・ネットの記事を見て ・仕事上、豆の採れる所 ・ウィンタースポーツの趣味	・西宮では木工房用の家を借りられない ・山とスキーが趣味 ・ニセコ周辺を物色 ・真狩村役場の紹介
黒松内に 住んでみて 良かった点	・自然が豊か ・時間がゆっくり流れる ・何も無い(大企業、リゾート施設) ・町民の頑張っている姿(人柄、魅力) ・子育て支援が厚い(教育、医療)	・川・空・水・空気がきれい(コーヒーをおいしく淹れられる) ・何も無いのが良い ・子供対象の施策が良い ・器・家・土地でなく、人間関係が築けた	・豊かな自然 ・海が近い ・観光地化されていない ・子育て支援が行き届いている ・近所の人が親切	・北海道は湿度が低く、木工には好都合 ・夏は涼しく(しっかり働いて)、冬はスキー
黒松内の印象 黒松内への注文 最近、気付いたことなど	・移って来て違和感が無い ・道の駅ができて、車と人の流れが変わり、町の中に入って来ない ・地元の人の自然環境に対する関心が低い ・本人に本人のことを直接聞かず、周りの人に聞くことがある	・他ではやっていない、新しいようで新しいことを始めている ・古くからのブナを大事にする目線を町民が持っている ・商品開発力がある ・移住に関しては先取り施策より心理的サポートを	・雪が多いのにびっくり	・最初は不便を感じたが、今はメリットがある(趣味など)
今後の夢・希望	・家の近くの川の傍にキャンプ場を開きたい	・人生観を共にする町の人と、今後のお互いの姿を見ていきたい ・生きていて良かったと思って死ぬること	・のんびり田舎暮らし ・本当に和生菓子が好きな人を対象に細く長く	・経営的には未だ安定していないので、定番商品として座り易い椅子をやりたい

※₁ B & B: ベッド・アンド・ブレイクファストとは、イギリスや北米、アイルランド、ニュージーランド、オーストラリアなど、主に英語圏各国における、多くの場合小規模な宿泊施設で、宿泊と朝食の提供を料金に含み、比較的低価格で利用できるもの。わが国においてはイギリスに多く存在する宿泊施設として認識され「B & B」の略称で知られる。(Wikipedia)

(2) 移住者の方々の意見から

悠々自適ではない。それぞれ、中身は違うが、生活の充実感を求めて、自活するための「手に職」を持ち込んで、家族を伴っての黒松内暮らしである。

どの家族も奥様の事情や後押しがご主人の移住の決断を促している。黒松内で生まれた子供達も居る。町内のイベントに積極的に参加している人達も居る。

土地や住居の準備、心理的サポートなど、町のハード、ソフト両面の移住者のための居場所作りも行き届いていると伺う。

既に高齢者の多い集落でリーダー的な役割を担っている方も居られる。移住者にとって大切なのは、「手に職」を武器にしたしなやかな逞しさと、出過ぎない程度の社交性のようだ(失礼)。

皆、収入は少ないが、黒松内に住んで、金や家、土地ではなく、良い人間関係を築けたことを喜んでいる。年収一千万円以上の方が客として訪れ、「うらやましい生活ですね」と言って帰って行くとのこと。

町の担当者の対応に感謝し、役場の宣伝や、実際に中を見学させて戴いてその快適そうな様子に見学者一堂が感心した和洋両タイプのお試し移住体験ハウスなど、町の移住受入体制を評価する人達だが、意見もある。行政の支援策目当てでネット情報などを元に観光目的で渡り歩いている人達もあり、あまり先取りの“いらっしゃい施策”を取らない方がいい、自力でやらせることが大切ということだ。

山村留学の子供を預かった経験のある人から、黒松内は「手に職」を持った若い人が来るには良い所との感想があった。コミュニケーションが取れる、目が届く規模・人口で、子供の教育にはちょうど良い、過疎の何が悪い、というわけだ。田舎には都会に対するコンプレックスを持つ子が多いが、自分の廻りにある物に対する自負やプライドを持つことが大切で、黒松内には誇りを持てる物が沢山ある、若い人が黒松内の進めるまちづくりの中に自分の夢を持って入って行くことで、大丈夫、食べて行ける、と助言しているそうだ。

年月の経過と共にそれぞれの事情も変わるので難しい面もあるが、20世帯を超え、50人以上を数

える移住者の皆さんの存在を町の活性化のためにどう活かして行くかを考えるのも行政の重要な仕事である。単に消費世帯が増えるという経済面だけでなく、持ち込んでくれた「手に職」や暮らしのスタイルを町の文化に融合して新たな生活ブランドを生み出すことや、外部との交流の機会に移住者の目で見た町の魅力を発信して貰うことなど、様々に考えられる。

何も無いことが移住者にとっての良さであっても、それが暮らしや産業を支える町民の誰にとっても良いこととは思われない。行政の納得性の高い政策目標と共に、双方の生活観のベターミックスを見出せるよう、屈託ないコミュニケーション機会の設定も必要である。移住者の皆さんが現在の生活スタイルを維持しながら移住者の存在でなくなった時、黒松内は更に好ましい町に変わっているのではないか。

5. 情報交換会(ワークショップ)

岩崎技術士の司会で、技術士と町役場の職員の方々とで3班に分かれてワークショップを行った。黒松内の「良いところ」、「改善の必要なところ」、「あったらいいと思うもの」を抽出し、現状の姿から見た黒松内の売りをキャッチコピーにまとめる作業である。紹介順序は逆だが、結論を先に、各班のコピーを紹介する。3班とも「自然」と「人(行政を含む)」の要素に集約される結果となった。

A班：厳しくも豊かな自然に恵まれてまちづくりの熱意に懸ける黒松内

B班：自然が結び付ける多様なコミュニティタウン、黒松内

C班：自然+人=豊かな黒松内！

(1) ワークショップによる意見の層別

ワークショップにおいてKJカードで出された意見の層別は班によって異なるが、柴田の独断で最大公約数的に共通性を考慮して項目を設定し、層別してまとめた結果を示すと次のようである。

(2) 層別結果から

「黒松内町の良いところ」 KJカード数(総数70枚)

項目	行政※ ₂	自然環境	人・文化	観光資源	暮らし(教育・医療含む)	地理・交通
枚数	22	20	13	8	5	2

「黒松内町の改善の必要なところ」 KJカード数(総数41枚)

項目	行政	自然環境	人・文化	観光資源	暮らし(教育・医療含む)	地理・交通
枚数	12	10	5	6	4	4

「黒松内町にあったらいいと思うもの」 KJカード数(総数33枚)

項目	行政	自然環境	人・文化	観光資源	暮らし(教育・医療含む)	地理・交通
枚数	11	3	0	5	8	6

総じて、ワークショップに参加したメンバーには黒松内町への好印象が強いことがカードの数から分かる。

行政(町政)の取組方針とその成果、町民のつながりの良さを評価する数が多い。「改善の必要なところ」と「あったらいいもの」には裏返しの関係が見える。「行政」に対する期待として産業振興に関する意見を含めた(※₂)ため、それが「行政」の「改善の必要なところ」と「あったらいいもの」の数に反映されている。それを考慮して、「良いところ」を挙げた数に対して、「改善の必要なところ」と「あったらいいもの」を挙げた数、或いはその計の数の方が上回る項目を見ると、「観光資源」、「暮らし(教育・医療を含む)」、「地理・交通」の3つと「行政」に含めた産業振興の部分である。

(3) 主な意見から

層別項目別の主な意見を以下に紹介する。

1) 黒松内町の良いところ

①行政

- ・町政の施策にコンセプト、戦略がある(同様1件)
- ・子育ての環境、施策が良い(同様2件)
- ・移住者が増えている(同様1件)
- ・町外との交流が盛ん(同様1件)
- ・教育環境が優れている
- ・医療費が中学生まで無料
- ・町外へ町の魅力が発信されている
- ・取組に工学的な視点を置いている
- ・ゴルフ場などの開発が入っていない

②自然環境

- ・北限のブナ林がある(同様4件)
- ・森林に象徴される豊かな自然(同様3件)
- ・山や川を町の自然財産にしている(同様1件)
- ・自然豊かな朱太川(同様1件)
- ・自然がよく整備されている(同様1件)
- ・水がおいしい(同様1件)
- ・おいしい空気

③人・文化

- ・町民が誇りを持っている(同様1件)
- ・人が温かい(同様1件)
- ・顔が見える、助け合える規模(同様1件)
- ・人と人の結び付き、ネットワークができている(同様1件)
- ・町を良くしようと思う人が沢山居る
- ・多様な人材が豊富
- ・移住して来た人達が違和感なく暮らせている

④観光資源

- ・恵まれた山・川の幸
- ・川が多い(遊べる、きれい)
- ・釣りができる(同様1件)
- ・特産品の食べ物(乳製品、ソーセージなど)
- ・美味しいお菓子
- ・リピーターの多いトワヴェール
- ・近くでスキーが楽しめる

⑤暮らし(教育・医療含む)

- ・ゆっくりした時間の流れ
- ・何も無いところが良い
- ・町並みがきれい
- ・金をかけない自給自足の生活ができる
- ・土地が安い

⑥地理・交通

- ・道南と道央を結ぶ要衝である
- ・四方に市が在り、車で出掛けられて不便は無い

2) 黒松内町の改善の必要なところ

①行政

- ・就労の場が少ない(同様 2 件)
- ・除雪対策が不足(同様 1 件)
- ・農業放棄地が多い
- ・住民参加型の取組が不足
- ・ビジネス化、具体化が不明確
- ・農業特産品の PR が不足
- ・競争すべきものが町内に無い
- ・やり過ぎの移住に関する補助

②自然環境

- ・冬が厳しい(豪雪、寒冷)(同様 2 件)
- ・農業生産に不利な自然条件
- ・米のできない気候
- ・晴れの日が少ない
- ・海霧が悪さをする
- ・何も無い所
- ・土地が狭い
- ・狭い農地

③人・文化

- ・若い人が少ない
- ・自立心、向上心が足りない
- ・一般町民が町づくりに関心が低い
- ・高齢化率が高い
- ・ゴミの不法投棄が多い

④観光資源

- ・道路が複雑で、施設を探し難い(同様 2 件)
- ・宿泊施設(ビジネス含む)が少ない(同様 1 件)
- ・道路沿いの廃屋が目立つ

⑤暮らし(教育・医療含む)

- ・進学校の問題(高校)(同様 1 件)
- ・医療の専門医が不在(同様 1 件)

⑥地理・交通

- ・交通機関(JR 等)、公共交通の便が悪い
- ・札幌・函館から遠い
- ・地域間が遠い
- ・海に接していない

3) 黒松内町にあったらいいもの

①行政

- ・農業にもっと力を入れて欲しい(同様 1 件)
- ・基幹産業(働く場)(同様 1 件)
- ・交流型から定住型への取組(充実)
- ・経済団体をコーディネートする組織
- ・人ネットワーク型ビジネスの推進
- ・地域資源複合型のビジネスの構築
- ・教育型ビジネスの推進
- ・活気ある商店
- ・自然以外の資源

②自然環境

- ・海、湖(水辺環境)
- ・朱太川をもっと活かす方法
- ・雪を活用するモノ・施設

③人・文化

(無し)

④観光資源

- ・町の歴史文化を聞く機会
- ・自然以外の観光の目玉
- ・町の情報の発信
- ・交流イベントがもっとあれば
- ・本州の人々がシーズンステイできる施設

⑤暮らし(教育・医療含む)

- ・高校(同様 1 件)
- ・病院(専門医)
- ・住民が自由に集まれる場所・施設(同様 1 件)
- ・スキー場にリフト(他にスポーツ施設で 2 件)

⑥地理・交通

- ・小樽への高速道路(同様 1 件)
- ・便利な公共交通手段(同様 1 件)
- ・新幹線(同様 1 件)

(4) ワークショップの結果から

2010 年度からの第 3 次黒松内町総合計画のシンボルテーマ「自然にやさしく・人にやすらぎの^ま田舎 みんなで歩む^ちブナ北限の里づくり」に掲げられた自然環境と景観を活かした交流事業、子育てや教育などの施策を評価する意見が多い。町民同士の結び付き、山や川など自然に囲まれた中での趣味の活

動や畜産・酪農加工品などの観光資源、寛ぎのある暮らしやすい田舎空間、町の規模は小さいがどこへでも繋がる地理条件、などが良さとして挙げた。

反面、地元雇用に繋がる産業振興に関する取組が少ないこと、冬の厳しさや海霧などの暮らしや農業にハンディとなる気象条件、道路の複雑さなどの外部から訪れた時の勝手の悪さ、少子高齢化の影響もあってか、町づくりやモラルに対する関心の低さも一部にあるらしいこと、高校や専門医療機関の無いこと、などが改善の必要なところとして挙げられた。

あったらいいものとしては、改善の必要なところの裏返しの期待として捉えられるものが多く、人材と地域の資源を活かした産業振興とビジネスへの取組、及びその推進力、町内に不足する教育・医療・体育関係の施設、自然環境以外の良さや町の歴史文化を観光資源とする取組、高速交通ネットワークの整備、朱太川や冬を活かす取組、などが挙げられた。

これらの良さを自信として、改善と期待に繋がる意見は、ハンディをメリットに変えるヒントと捉え、今後のまちづくりの参考にねばと思う。

黒松内町では、地域資源を有効活用する循環型産業の創出、人材交流による地場産業の指導育成、特産品宣伝活動の拡大、畜産・酪農製品の地産地消の拡充、自然環境ばかりでなく農業・農村の教育的機能を活かした交流事業など、今回取り上げられた課題に対し既に取り組んでいるものも多くある。

また、町外との交流も活発で、外からの新しい価値観による長所の発見、新しいアイディアの発掘・構築などに繋がっている。80年以上前にその存在が奇蹟と言われたブナ林だけでなく、最近、朱太川の生態系の健全性が専門家から称賛されていることもその表れである。人口減少と若年層の流出、高齢化の進行など、多くの地域で閉塞感が強まる中、これまでの外へ開かれた姿勢と、その繋がりを町政や暮らしに活かしていくことが今後も必要と考えられる。

6. 北限のブナ林ひとくち知識

黒松内ブナセンターでの齋藤学芸員の説明、歌オブナ林を案内してくれた松浦学芸員の初々しいガイ

ド振りの中から北限のブナ林について紹介する。

- ・大正12年(1923)からの札幌農学校(現在の北海道大学)林学科の新島善直教授の調査により、昭和3年(1928)に歌オブナ林が北限の自生地を代表するブナ林として国の天然記念物に指定される。
- ・間氷期と氷期で北限の進行と後退を繰り返す。約2万年前のウルム氷期には北限域が新潟県辺りまで南下、北海道への再上陸は約6千年前、黒松内低地帯に辿り着いたのは約1千年前。
- ・ブナの日本の南限は鹿児島県の高隈山地。
- ・現在、千葉県と沖縄県にブナは無い。
- ・北限域のブナの葉は南限域の物に比べ4倍も大きい。
- ・クマゲラは黒松内町の「町の鳥」に指定され、国道のロードサインにもなっているが、一組のつがいの生活に必要な森林の広さは100～300ha。歌オブナ林は92haで一組のつがいにギリギリの広さ。
- ・北限域のブナは成長が早い反面、更新も早い。他地域の平均寿命約250年に対し、約170年前後。
- ・途中で3つ股に分かれている木は、そこに神様が宿ると言われている。3つ股の木は切った時に、どちらへ倒れるか判らないので、危険なことを知らしめるための戒め、言い伝えではないか。
- ・ブナの種子を遠くへ運び、その更新に役立っているのは、種子を冬の食糧にする鳥やリス、鼠など。
- ・黒松内低地帯のブナ林は飛び地状に分布している。これまでの保全から、昔のような連続分布への再生のため、種子を運ぶ鳥や小動物の役目を担うのが私達の務め。
- ・現在、歌オブナ林では散策の転換を図っており、結婚式やオルガンコンサートなども行っている。

7. 若見黒松内町長の講演要旨

黒松内町は、北海道で最もくびれた部分、寿都湾から太平洋にわたる直線距離28kmの黒松内低地帯に位置する。羊蹄山麓の豪雪地帯で積雪深は2mにもなる。札幌と函館の中間に当たり、50km圏内には洞爺湖、ニセコなどの観光地があ

る。春から夏は黒松内低地帯を流れる海霧の影響で日照時間が少なく、稲作はうるち米よりも寒さに強いもち米を、他には馬鈴薯などの根菜類も作っており、酪農畜産も盛んで、北海道を凝縮したような農業形態となっている。

人口約 3,200 人、高齢化率 33.5%だが、合計特殊出生率は 1.53 人で全国平均・全道平均を上回る。面積は 345 ha でその 76%が森林である。福祉が充実しており、利用者も含め町民の 40%が何らかの形で福祉に関係している。特産品には、地元酪農畜産の素材から作られるトワベールブランドのアイスクリーム、ハム、ソーセージなどの加工品がある。

朱太川と北限のブナ林が黒松内の豊かな自然を代表している。朱太川の延長は 40 km を超え、150 の支流があるが、生物多様性の点で言えば、本流にダムが無いことで河川の連続性が保たれ、海から淡水域を行き来する「通し回遊性生物」が多く棲んでいる。東大の調査では、絶滅が心配されているカワシンジュガイの稚貝が見つかったり、27 種類発見されている魚の内の 17 種は絶滅危惧種で、本州にはそのような川は少ないと言われている。アユとヤマベやサケなど、温帯性の魚と寒帯性の魚と一緒に産卵していることなど、日本の中では貴重な自然環境が整っている所として専門家の関心の眼が注がれている。

歌才のブナ林は昭和 3 年に国の天然記念物に指定されている。過去 2 度の伐採の危機から守られた歴史に学び、歌才のブナ林は 20 年来のまちづくりのシンボルとなっており、あるがままの自然資源として都市と農村の交流の一つの核となっている。関連する 7 つの複合交流施設については、それぞれが相互補完的に活用される仕組みを作っており、あくまでも使うてなんぼのまちづくりの手段として活用している。

かつては扱い難いとか価値が無いと言われ、ブナ退治とも言われたが、一般的な木偏に無という字から貴という漢字に変え、その字をお酒のラベルに使うなどして、価値観の大転換と発信を図っている。

水辺環境の再生、里山の再生、景観条例、全ての

水は朱太川に集まることからその対策の徹底など、ブナ林以外の自然環境の整備にも取り組んでいる。ブナや自然環境をテーマにした国際的なイベントに国内外の研究者が多く訪れ、希少価値を含めた豊かな自然の発見や発信に繋がっている。

最近では交流人口が 15 万人にもなってきたが、課題も出てきた。ブナ林の入林者増加に伴う腐葉土の減少と根の露出、高速道路などの大規模工事による水環境の汚染、大規模開発の触手などである。この課題解決のために「山がき、川がきの棲む^ま田舎」を創ろうというテーマで平成 9 年に黒松内環境基本計画を作った。この中に環境管理土地利用構想を盛り込み、経済的な視点が主だったこれまでの日本の土地利用の考え方から離れ、環境を管理する基本的な取組の中で、人間の経済活動を考えていくようにしている。大事なものは水と緑のビオトープ・ネットワークで、ヒグマやクマゲラ、サケなどの野生生物の棲息できる水辺や緑地を確保することが目標となる。この構想を実施に移すために、平成 9 年の計画を生き物の視点で検証し、バージョンアップを図る意味から、この 2 年間で黒松内町生物多様性地域戦略を策定する。環境資源の質と量を算定し、保存・活用・つなぐ・再生・修復などの必要な環境を選定し、個々の特性により、有効な対策に結び付ける。保全すべき資源となるブナの林は努めて購入していく。

最近、北海道内で外資が土地を買い漁っているが、黒松内の生物の多様性は日本の財産であり、みすみす外資へ売ってしまうことはしない。それは行政の大きな課題であり、民有林が多いことで触手は伸びてきているが、大きな声で言うていく必要がある。

最後に大事なことは、いかにこの自然環境と地域経済を結び付けるかということである。黒松内町民が心豊かに成長できるよう、技術士の皆さんの眼でアイディアを戴くことができればと思っています。

8. 終わりに

若見町長は、昨年 10 月 26 日から名古屋市で開催された COP10（生物多様性条約締約国会議）の国際自治体会議の分科会で事例発表を行っている。

それに先立ち7月に津田ホールで行われた国際フォーラムでも話題提供されており、その中からまちづくりに関連する部分についてお話を戴いた。

黒松内の豊かな自然に惹かれて移住して来た方々、天然記念物の歌オブナ林、ブナ林の保存と再生をテーマにした研修施設、町の行政の取り組みと意見交換、移住体験お試しハウスなど、自然環境の保全を基本としたまちづくりを学ぶ良い機会となった。

黒松内の自然と暮らしを特徴付けるものに夏の海霧の存在が大きい。噴火湾からのそれは黒松内低地帯を分厚く覆い、渡島半島から後志地方の夏の快適な気候を横向きのエアーカーテンのように分断する。農業の面ではデメリットの部分が大きい、ブナ林を中心とする森林の形成には一役買っている。

朱太川は、噴火湾からの「だし風」が日本海へ抜ける隣の寿都湾に流れ込み、ブナの森からの栄養素を運んで来る。それが寿都湾の種類豊富な水産資源に繋がっている。自然環境の良好な保全は一自治体に止まらない越境効果がある。

黒松内低地帯の周辺には青函トンネル工事で有名になった黒松内層やその上部の瀬棚層の地層が見られ、その中には貝化石のように、今日の生物多様性に繋がる歴史が眠っている。その背景として、噴火湾、黒松内低地帯、寿都湾に繋がる自然環境の循環メカニズムにも関心が高まる。古い地層を枕に眠る貝化石の太古からの夢を私たちもタイムトラベラーとして体験できるスペースがあればと思う。

作家C・W・ニコル氏は「多様性は可能性」と言う。同様に循環性は依存性と考えることもできる。柳田國男が遠野地方の民話を収集し、「遠野物語」として発表してから百年、黒松内の生物多様性に連なる生き物たちの相互の依存性を物語風にまとめているのも面白い。

高校が無いことから高校・大学世代の存在感が薄い、自然環境の保全を町政の基本方針として継続するには、研究や保全活動のための地元人材の育成も必要ではないだろうか。北限のブナ林再生で価値観を共有する黒松内・寿都・島牧の南後志3町村連携の取組の一つとしても考えられる。

体験交流人口の増加と自然環境の保全は相反することで対応が難しいが、許される最低限の設備や立入制限など、自然と人間の間に理解という緩衝帯を設けることができればと思う。

環境の保全と地域経済を結び付けることに関しては、環境に対するよそ者の評価が地域の暮らしや産業、新しい開発の足かせになるという考え方もある。しかし、豊かな生物多様性について高い評価と関心の集まる今が、それらを今後の方向性への動機付けとして活かすチャンスでもある。スイスでは国が農業に多くの予算を出してあの心和む景観の維持に努めてきたと聞く。「写真写りの良い町」の東川町のように景観は住民のモチベーションにも繋がる可能性がある。町民の参加意識で生物多様性を支える黒松内の景観要素を発掘・整備すると共に、その延長上で、町内産業の資源循環サイクルと暮らしのスタイルを黒松内ブランドとして定着させ、発信していくことが、長い目で見て有効ではないだろうか。

黒松内は、体験学習交流だけでなく、フットパスのような景観と健康を目的としたイベント交流も盛んで、「外に開かれた町」、「外とつなぐ町」の姿勢が顕著である。それが、外からの刺激と共に、自らの足元を見直す眼を養うことにも繋がっている。森林以外に産業の素となる資源には乏しいが、自然資源には恵まれている。町と町民はこれまで歌オブナ林と朱太川に代表されるふるさとの自然資源をベースに、地道にその足元を強くすることに力を注いでいる。それが今の町の魅力であり資源でもある。

柴田 登 (しばた のぼる)

技術士(建設部門)

北電総合設計 株式会社
営業部

